

酪農経営から肉用牛繁殖経営への転換 ～「か・き・く・け・こ」の実践～



大坪牧場

佐賀市川副町



牛舎遠景



労働力の構成

区分	経営主との 続柄	年齢	農業従事日数(日)		部門または作業担当
				うち畜産部門	
家族	本人	57	300	280	繁殖部門全般
	妻	55	300	280	子牛の哺育・育成
	長男	28	300	300	人工授精・繁殖関係
臨時雇	のべ人日 100人日				稲わら収集

飼養状況

	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
飼養頭数 (頭)	63	74	80	81	79
販売頭数 (頭)	44	50	69	76	77
売上高 (千円)	17,493	22,181	32,072	39,889	38,310

経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付 面積	経営・活動の内容
昭和		(頭)	(a)	
45年	乳牛	20	250	就農
63年	乳牛	28	275	肉用牛繁殖へ取り組み開始、 沖縄県より3頭導入し1産取り肥育。
平成	和牛	3		
3年	乳牛	10	325	酪農経営を中止し繁殖経営一本へ。
	和牛	18		
9年	和牛	25	325	自家保留、自己資金による増頭。
13年	和牛	50	325	哺乳ロボットを導入。
15年	和牛	63	325	後継者、就農。家族経営協定を締結。 牛舎、堆肥舎を建設。
18年	和牛	82	404	県畜産協会の
19年	和牛	79	500	経営診断を受診。

経営の特徴

- ① 超早期離乳の実施（分娩後4日）
- ② 哺乳ロボット活用による省力化
- ③ 「か・き・く・け・こ」の実践
（観察、記帳・記録の徹底）
- ④ 借入金に頼らない規模拡大
- ⑤ 飼養牛に対してゆとりある環境の提供

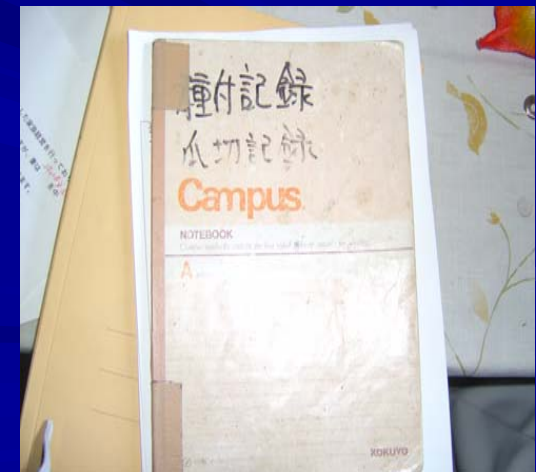
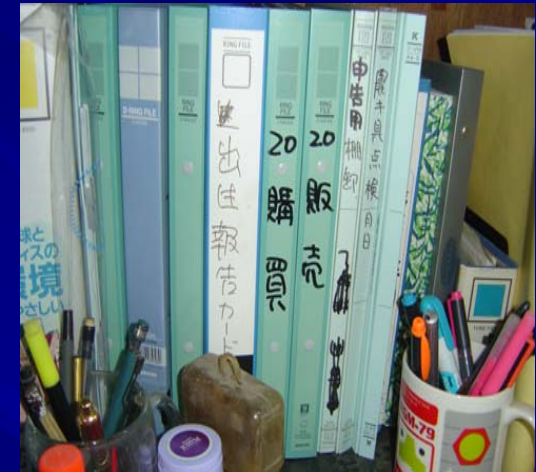
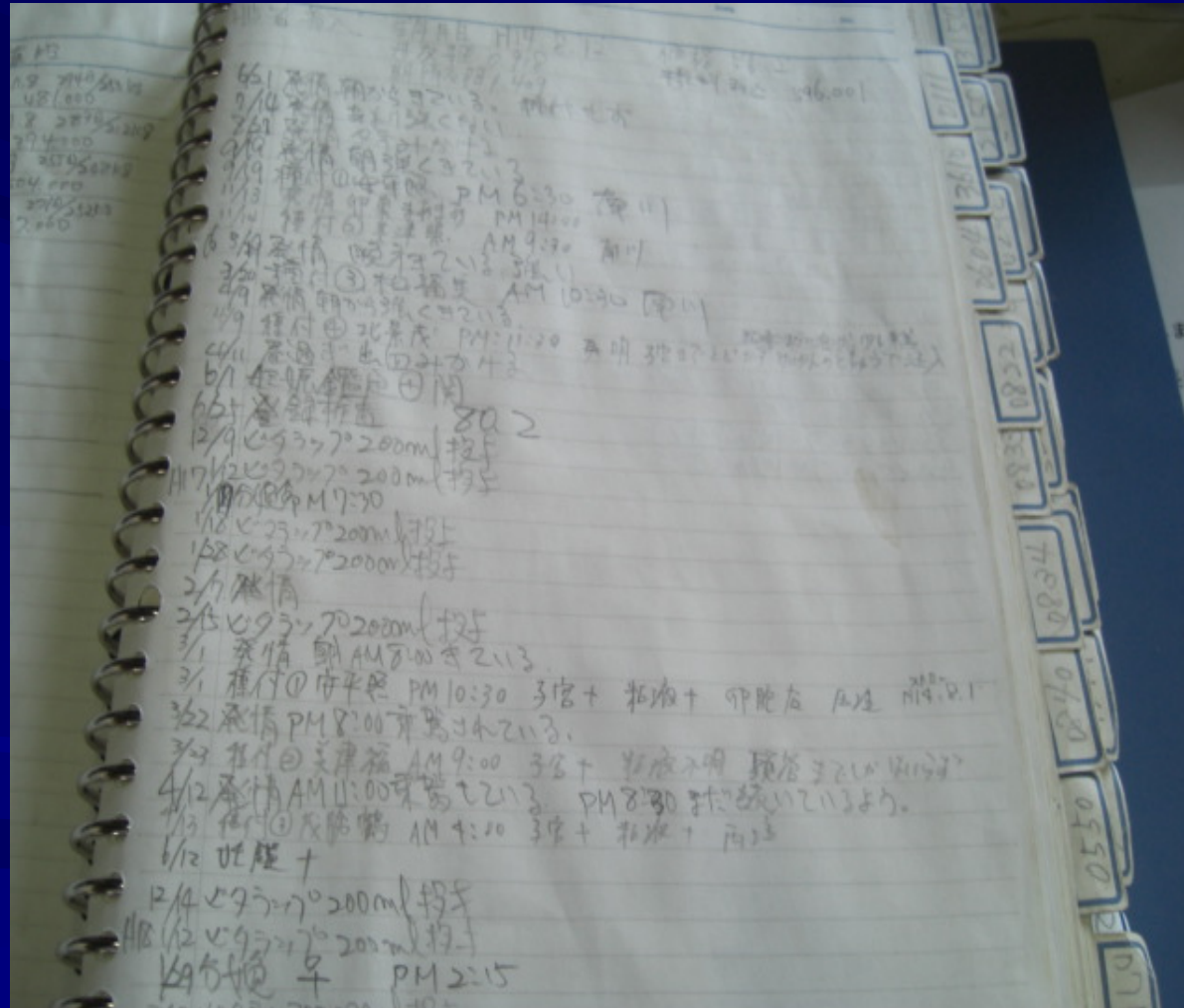
哺乳ロボット



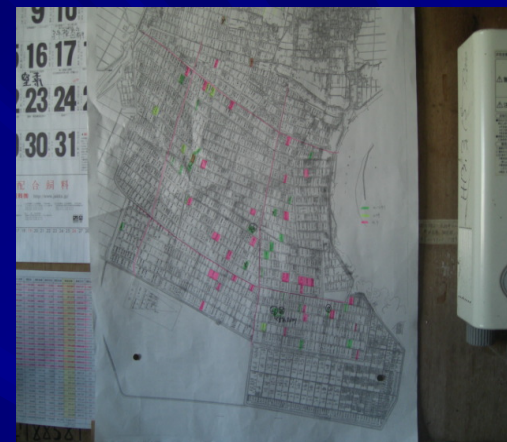
「か・き・く・け・こ」の実践

- 「**か**」観察する＝朝、夕の飼料給与時と就寝前には、発情兆候や健康状態のチェック。
- 「**き**」記録する＝繁殖台帳、販売記録、その他作業内容を記録。
- 「**く**」工夫する＝乳牛舎をフリーバーンに改築、暑熱対策やステージごとに分けた牛房のづくりなど工夫した施設。
- 「**け**」計画を立てる＝酪農から肉用牛繁殖経営の切り替えや、年次ごとの増頭、施設・機械の導入は計画的に。
- 「**こ**」行動を起こす＝先進農家への視察・研修、ET移植、哺乳ロボットの導入など積極的な行動。

毎日の記録簿



稲わら収集計画



牛舎



酪農牛舎を改築した牛舎



平成15年に新設した牛舎

自給粗飼料の確保



牛舎裏に作付けした青葉ミレット

堆肥舎



経営の成果

(平成18年度)

【繁殖技術】	成果	(県の指標)
○平均分娩間隔	11.8ヶ月	(12ヶ月)
○分娩率	101.3%	(100%)
○事故率	0%	(3%以下)
【経営状況】		
○母牛頭数	76頭	—
○子牛出荷頭数	76頭	—
○子牛1頭当り売上高	524千円	—
○子牛1頭当り生産原価	317千円	—
○子牛1頭当り所得	207千円	—

今後の目指す方向性

1. 育種価を活用した優良子牛の生産と繁殖牛の改良による、より強固な生産基盤の確立。
2. 肥育部門を取り入れた一貫経営の確立。
3. 自給飼料の生産拡大。
4. 堆肥と稲わらの交換による資源循環型農業の確立。